

鏡花全集

卷四

讀心全集

工業学院图书馆
藏書章

鏡花全集 卷二 第二回配本

昭和十七年九月三十日
昭和四十八年十二月三日

著 者 泉 鏡 太 郎

發行者 岩 波 雄 二 郎

發行所 株式會社 岩 波 書 店
東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號

印刷 三陽社 製本 松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

辰巳巷談	(明治三十一年二月).....	一
蛇くひ	(明治三十一年三月).....	一〇七
山僧	(明治三十一年四月).....	一二五
笈摺草紙	(明治三十一年四月).....	一四二
黒百合	(明治三十一年五月).....	二〇七
星あかり	(明治三十一年八月).....	三七七
鶯花徑	(明治三十一年九月).....	三八七
通夜物語	(明治三十一年九月).....	四三五

梟物語	(明治三十一年十一月).....	五四
五本松	(明治三十一年十二月).....	六三九
繪日傘	(明治三十一年十二月).....	六四九
立春	(明治三十二年一月).....	六八一
三尺角	(明治三十二年一月).....	六八九
三尺角拾遺	(明治三十四年六月).....	七三

辰巳巷談

豆腐長屋

うろく船

澁團扇

三枚目

留女

刎釣瓶

たの字

後姿

百夜通

みゝすばれ

はがひじめ

土手

の芝

豆腐長屋

一

「車夫、幾干ばかり橋を通つたらう。」

車には紺地の單衣を着た二十一二の、色の白い、細面の少年が乗つて、膝の上に兩手をかけて、斜に扇子を構へ、屹とした品の好い姿で、恍惚して居る。いま橋を一箇渡つたとき、早船が一艘、十四五人の乗合ひで、上の方から下つて來たが、月影の中に團扇を持つたのがあり、また麥藁帽を被つたのもあり、いづれも水面に墨を流したやうな舟に、少し曇つた白い衣服。

其が不圖橋の下に入つて消える、と鴉が鳴いて、遙かに飛び去つた海の方には霧がかゝつて、ぼんやり白けて居て、渺として果のないなかに、ちらりほらりと松の樹が立つて居る。ずつと近く楫棒に擦れ合ふばかりの處、路ばたの砂地に船が引上げてある、十四五艘も並んで居よう、其中に擡んでた舳が煙突のやうに高く空を指して、船と船との間處々に、かけてある藁小屋の屋根

に乗つかつてゐるやうなのが月明にあり／＼と見える。前途を廣々と環取つた空の低い處に、小さく群つた星の斷間に、自芙蓉の花が風にひら／＼と動いてゐるやうな蒼い色は、洲崎の電燈の光である。

車は橋の勾配を這つて、窪地へする／＼とはずむで下りた。蟬殻をばり／＼と碎いて片碎の白いのを二ツ三ツ路傍へ蹴散らした。

車夫は反りかへるやうに腰を伸して、

「大橋を渡りましてから、左様ですな、十餘りもございませうか。八幡様から此方ばかりでも、五ツ六ツは渡りました。」

「さうか、橋ばかり澤山ある。」と少年は車の上から川を見下ろして、且つ船を見上げた。

「旦那、何の邊でございますね。」

「何でも此邊だらう、何處かで聞いて見るが可いや。」

この路傍の砂地を奥へ引込む處に、茅屋が一軒、戸障子をあげ放したのが、蚊遣の煙で朦々と燻つた暗い中に幽に見える。

車夫は透しながら片手で汗を拭いた。

「少々ものを伺ひたいんですがいますか。」

黙だまつて返事へんじをしない。

「御近所ごきんじよに……」といつて車夫しやふは振返ふりかへつた。

「旦那だんな。」

「平田ひらた。」

「え、其平田そのひらたさんてえのはありませんかい。」

女の聲をんなこゑで、

「存ぞんじませんよ。」

「何どうも。へい、」と腕車くるまを引出ひきだす。車輪しやりんがぐる／＼とまはる中なかから、少年せうねんは振返ふりかへつて、其茅屋そのあばらやの奥おくを覗のぞ込む、と煙けいの中に團扇うちあはがあつてひらく／＼と動うごいた、其團扇そのうちあはに絡かはつて絲いとの亂みだれたやうに蚊遣わりのなびが靡なびいて分わかれた——其時そのとき——枕元まくらもとに年としの少わかい婦人をんなが悄乎しよんぼりすわ坐すわつて、病人びやうにんと思おもはれる、其母親そのは、おやらしい婆ばあさんが顫はら巻まきをして、俯向うつむいて寢ねて居ゐると咄嗟とつさに見みて取とつた。

少年せうねんは兩りやうの手に扇あふぎの要かなめを握にぎつて、肩かたを細ほそうして首垂うなだれたが、何なんと思おもつたか聲こゑを懸かけて、

「車夫くるまや、分わかりさうもないぢやないか。」

「何なにわけはありません。モ一度其處そこらで聞きいて見みませう。」

「知しれなきやあ可いや、歸かへらうか。」

「念のためでさ。えゝ、畜生。」

と野良犬を呵して、威勢よく前途へ驅ける。

二

「親方、ちよいとものを伺ひたうございですが。」

「何だね。」といったのは頬骨の尖つた、胸の赤い、肥つた男で、帶も締めず、浴衣を羽織つて、納涼臺の上へ片足をぐいとあげて、團扇使をして居る。おなじ納涼臺に、二十二から四五までの逞しい壯佼が未だ三四人ならんで掛けて居た。

「入舟町の……番地は此邊でございませうか。」

「むゝ、此處だよ。」

片側は胡瓜畠で、ちやうど其納涼臺を置いてある背後はまばらな竹垣で、片側には豆腐を切つたやうな、眞四角な、長屋が五六軒一列にならんで、戸を閉めて寢靜まつた處があり、軒に風鈴の鳴つて居る處もある。路地の口は一間にも足りないから、腕車を呑むと支へさうな。

「それでは平田さんといふのを御存じではございせんか。」

「平田だえ。何うだ知つてるか。」と件の胸赤は頗で横を見た。

「平田、分らねえな。」と隣座の若いのがいつた。

「商賣は何だ。」とまた其次に居たのが聞く。車夫は振返つて客を見ると、少年は帽を取つて、失禮、何をして居るんですか、平田といふので。」

「あ、そりや何でせう、」

突然冴えた聲がして、直ぐ軒下に釣つてある、低い蚊帳を、白い手でかゝげて出たのは、結髪増である。白金巾を短く腰に纏つたまゝ、肌には絲もつけない、素裸體で、片膝立てて蚊帳の外に潜つて出て、

「三八さんの處でせう。それはね、」といひながら足をおろすと、直日和下駄を突懸け穿、裸身のまゝで路地へ出た。

「直ぐね、其壁ン處を突當りますとね、井戸がありますからね、井戸についてモ一ツ路地をお入りなさい、左側の三軒目のお長屋ですよ。」

「向うの藏ですか。」と車夫は提灯をあげて路地の突當の瓦屋根を仰いでいつた。

裸體の婦人はまた近寄つて、

「藏から曲るんですよ。さうすると井戸がありますからね、井戸から三軒目さ、左側よ。」とさきへ立つて指をする。

「御親切様に、難有う存じます。ぢやあ旦那、」

黙つて少年は頷いた。

静に曳いてがら／＼と音がすると、ハヤ突當つて腕車は見えなくなる。

「姉え、何だな。」と見送つて胸の赤いのが聞いた。婦人は路地の中に立つて腕車の行つた方を見て居たが、呼ばれて、身を捻つて、莞爾して、

「ほら、あの一件が居る内さ。」

「何だ、あの例物か、例物。」と、降つて來たといふ狼狽加減で、若いのは棒のやうになつて納涼臺を離れて突立つ。

「何だ、何だ、一件だわ、例物だわツて、孰ちも分らねえ。」とまた一人がいつた。突立つたのは思入ありといふ身振をして、

「素ばらしい奴よ。」

「む、掃溜の鶴か、此頃の、さうか、あれか、あの内の、ふむ、」といつて頷いて居る。

「六さん、何だとえ、掃溜の鶴だとえ。」

「さうよ、溜池の蚊ぢやあねえ。」

「憚様、何うせ私どもは掃溜の南瓜でございます。」

これはまた意外のすね方だから、飲込めない顔をして眼を睨つて居た、六は心着いて苦笑をした。

「なにもそんなに氣をまはさなくツたつて可いやね、そりやね、お前掃溜だけれど……其、」

「矢張掃溜ぢやありませんか。」と婦人は笑ひ出した。

「そりやさうと、今來たなあ何だらう。」

「蟲だらう。」と、立つてる若いのはいつた。

「生白い蟲ぢやあねえか。」蝶だらう、いや夏蠶だらうと、わやぐいつてる内、胸の赤いのはぴしやりと胸へ來た蚊を叩いて、

「二才め、巫山戯たことを！」忌々しいといふ顔色。

三

腕車は藏の壁に添つて左へ曲ると、果して總井戸があつた。少年は前屈になつて四邊を見た

が、
「下りよう、下りよう。」とおさへるやうに聲を懸ける。輪のまはる發奮だからぐるぐると引込むで、がつたり路地口の狭い處へ嵌まつたやうになつて止まる。

と、二條格子の膝懸を片手で掴んで搔遣りながら、蹴込へ眞直に立つて少年はひらりと下りて、桿棒を跨いで路地へ出た。

拔裏の砂地に建ててある車止の、香の圖を略したやうな棒杭を潛つて、半襦袢に湯巻をした白い扮装の女が一人、目簀を小脇にして出て來たので、少年は一足後へ引いて身を開き、轡頭を取つた姿で泥除に手をかけながら、身體を附着けて透かして呢と見た。

車夫は提灯を片手にして、いま少年が掴み落した膝懸を取つてはたいて居る。婦人は路地の中ほどで立停まつて、此方を覗つたやうであるが、其ま、赤黒い灯が幅一尺ばかり洩れて見える一枚はづした戸の内へツイと入る、同時に固くなつて立つた少年はツカ／＼と歩行き出して、件の長屋の前へ行つて、ちよいと覗くと、まだ内へは入り切らないで框に立つた婦人が、邪慥に毗を釣つて、鋭い瞳を寄せて、ツ、ケンドンな、沈んだ聲で、

「何です。」

「いゝえ。」

といった切、少年はふいと通抜けてずつと行き、あの車停の杭の處で立停まる、と婦人は、手荒く戸を鎖してしまふ。

路地は暗くなつて廂へ月あかりが薄くさし込む、片側に並んだ幾軒の長屋は盡く寂寥として、

本地の亂暴な、節穴だらけの門の戸が、唯一枚の板のやうで、處々表戸の合せ目が黒い筋を引いて間をおいちやあ、順序よく縦に並んで居る、其が長屋の數であらう。

車夫は提灯を左右に振つて、立停まつては仰いで見、立停まつては仰いで見、一軒、二軒、三軒と順々、門札を見て歩行いたが、今戸を閉めて引込だ其隣家の前に立つて、身を反らしながら仰向いて、思切つて提灯を高くさしあげた。あかりがうつつて顔が赤くなつて見えたが、門札を讀んだ。

「平田、平田三八。」と高い調子、提灯を振向けて、

「此處です、平田三八、此處ですよ、旦那。」と少年を呼ぶ。ちやうど棒杭に背を凭たして、思ふ所あるらう軒合の月の形をすかして居た少年は、此聲を——車夫の此高聲を聞くとはツとした様子。ぶらりと膝に垂れて居た扇持った手に力が籠つて、要を取直すと身構しつゝ、無言でつかつかと、しかし足音をば浮かして寄る。

「寝てますが、旦那。」と車夫は二ツ三ツ戸の合目をがたく鳴らして、

「敲きませうか、え、たゝきませう。」

少年は黙つて居る。

「まだ十二時にやなりません。夏の内あ宵の口でさ、たゝいて見ませう。」

と握拳を上げたのを、思はず手に持った扇でおさへた。銀の要であらう、キラリと指の間に輝いた。車夫は怪訝な顔で、少年の顔を見て控へて居る。

少年はおさへるやうにソツと板戸へ手をあてて、瘡ぎすな立姿をひつたり寄せ、鼻筋の通つた顔を斜に、戸の合目に耳をおつ附けながら、しばらく身動きもしなかつたが、力なさうに扇を垂れて、立つたまゝ、膝を組合はせて、下駄の爪先でコトコトと地を踏む。

四

おなじ長屋内だけれど何處だか分らない、手に取るやうに嬰兒の啼聲がして、むゝゝと譫言のやうに、乳を頬張らせたやうな氣勢がする。

板戸に取つて耳を濟まして居た少年は、戸を突いて見ようともしないながら、なほ立去りかねたか、猶豫つてゐるので、車夫はもどかしくなつたんだらう。

居合腰になつて、蹈張つて、足に力を入れて、手つきで教へながら少年の顔を仰いで、

「どんとおやんなさい、構はずお遣んなさい。まだく早いんでさ、御遠慮なさることあねえ。」と何か知つた風で、故とらしく聲を潜めながらいふ、少年は餘計なことをと氣を揉む狀、眉根を寄せて聞いて居たが得堪へなかつたか、手を掉つた。